

<小学生・中学生・高校生の意見発表>

あいさつでつながる明るい社会

形原小学校 6年 松原 萌香

松原さんは、多くのことに興味を持ち、何事にも一所懸命になれるがんばりやさんです。歌声集会では、指揮者として学級の歌と心をひとつにまとめました。後期は児童会役員として、学校の心を一つにしようと熱心に活動に取り組んでいます。

「おはようございます」「さようなら」「ありがとう」などの日常のあいさつ。文字で書くのは簡単だけど私は恥ずかしくて、なかなか言うことができませんでした。そこが自分の嫌なところでした。いつも家で「あいさつするよりも、しないことの方が恥ずかしいことだよ」って言われていたからです。

そんな自分を変えたいと思い、5年生になったときボイスチェック隊というおたすけに入りました。おたすけというのは形原小学校で自分たちが率先してやろうという意味を込めて取り組んでいる委員会活動のことです。ボイスチェック隊は、「あいさつができる学校」を目標にして活動しているおたすけです。その仕事の1つに1のつく日にみんなより早く登校して玄関のところで「おはようございます」とあいさつをします。はじめてのときは緊張と恥ずかしさで大きな声を出せませんでした。でも何度か活動するうちに自然に声が出せるようになってきました。そのときは、恥ずかしい気持ちはありませんでした。それよりも自分が「おはようございます」とあいさつしたときに大きな声で返してくれると、とても気持ちがよく、うれしくなります。逆にあいさつが返ってこないとても寂しくなります。今までの自分もきっと相手をこんな気持ちにさせてしまっていた

のかなあと反省しました。そしてボイスチェック隊に入って気づくことができよかったですと思いました。

また、あいさつはただすればいいものではないということにも改めて気づきました。あいさつをするときには相手に聞こえるはっきりした声で、そして笑顔でするのが一番素敵なことだと思いました。そうすることで周りも明るくなると思うからです。元気がない暗いあいさつではあいさつされた側も気分が暗くなってしまいます。

こういう大切なことに気づいたのですが、私のあいさつはまだ十分でないのが反省点です。頭の中ではわかっているのですが…。

特に私がそう感じるのは、毎日学校の登下校のときに、私たちを見守ってくれている「見守りたい」の方や交通指導員さんが、明るく

笑顔で「お帰りなさい」「こんにちは」「さようなら、気をつけて帰ってね」と声をかけてくれるときです。ほとんど知らない方だけど、その言葉を聞くと不思議と安心して気分が落ち着きます。本当なら「いつもありがとうございます。さようなら」と私も言わないと



いけないのにまだできていません。小声で「さようなら」と答えるのが精一杯です。情けないです。何とか卒業までに必ず明るく元気な声であいさつと感謝の気持ちを言えるようにしたいです。

最後にあいさつは、人と人との関わりで欠かすことのできない大切な言葉だと思いま

す。「おはよう」「さようなら」「ありがとう」これだけで新しい人とつながるきっかけになり、より親しくなることができる魔法の言葉です。だからこそ自分から進んで、明るく笑顔で、そして相手に届く声であいさつをしていきたいと思います。

弟がくれた気持ち

塩津小学校 6年 木 俣 真 菜

真菜さんは、だれにでも温かく接し、相手の気持ちになって行動できます。吹奏楽部ではトロンボーンを担当し、敬老会では、お年寄りの心を和ませる演奏ができました。6年生として、あいさつ運動や縦割り活動で、全校の手本になろうと毎日頑張っています。

※ なお、この作文を「第63回社会を明るくする運動作文コンテスト」に応募したところ、「社会を明るくする運動愛知県推進委員会委員長賞」を受賞されました。おめでとうございます。

「なにあの子。」

弟が生まれる前のわたしは、障害を持っている子を見て、自分とはちがう、何だか変な子だと思っていた。でも今では、そんな自分をはずかしく思う。

わたしの弟は、ダウン症だ。それは、約千人に1人の確率で生まれてくる不思議な障害。弟は、わたしが5才のときにお母さんから泣かずに生まれてきた。小さな体で何度も手術を受け、それでも負けずに生きてきた。

ある日、保育園で、トイレに行く時にお母さんといっしょだった。保育園で他の子から、「どうして一人でトイレに行けないの。」

「なんで傷があるの。」

いろいろな聞かれた。でも、お母さんはどんなことを聞かれても、いつもやさしく答えていた。弟の障害にめげず、聞かれたことにきちんと答えているお母さんの姿が、かっこよく見えた。お母さんがだれの質問にも優しく答えたことで、弟のことをわかってくれる子

が増え、保育園で友達もできた。

今年弟は、小学校に入学。しかも、わたしと同じ塩津小学校に。小学校に入学してから、弟は毎日少しずつ成長している。入学したばかりのころは車で登校していたが、最近では、わたしといっしょに歩いて班登校をしている。給食では、今まで食べなかった物も、好ききらいせずに食べている。先生やクラスの友達、仲良し組の友達に見守られて、がんばっている弟。でもそんな弟を、

「なにあいつ。気持ち悪いし、おかしいんじゃない。」

昔のわたしと同じ目で見ている子もいる。わたしは、お母さんが言ったことを思い出し、

「そんなこと言って楽しい。もし、自分が言われたらどう思う。いやじゃない。」

精一杯の力を出して話した。今にも心ぞうが



飛び出しそうだった。

「ごめんなさい。」

「一生けん命生きている子もいる。そんな子たちを見守ってあげてね。」

あやまった子たちに、昔の自分への反省の気持ちをこめて、話した。

この一言を言ってから、わたしの心が変わった気がする。今までのわたしは、悪口を言われた弟を守るのが精一杯だった。でも今は障害のある人の気持ちをいろいろな人に考えてほしい。わたしたちと同じように、わた

したち以上に一生けん命生きていることを伝えたいと思えるようになった。わたしをこんな気持ちにさせてくれたのは弟だ。わたしは姉として、これからも弟を支え続けていく。

弟がくれた気持ちを大切に、わたしはこれからも、障害のある人達とたくさんふれ合い、いろいろなことを知って、障害者の大変さや苦しみを伝えられる人になりたい。そして、障害のある人達にも、元気と勇気をあげられるような大人になりたい。

希望の種

蒲郡中学校 3年 大村 有里依

大村さんは、自分に厳しく仲間に優しい人柄で、常に仲間の笑顔に囲まれています。学習にも前向きで、また、剣道2段の腕前で、文武両道の姿勢を貫いて頑張っています。

「忘れていませんか。」

はるか遠くまで広がるひまわり畑の前で、笑顔で写っている人たち。その笑顔の明るさに負けないくらい輝いて見えたひまわりの花。蒲中で毎月配られる「大好き蒲中」にのっていた一枚の写真に私は目をとめました。

「福島ひまわり里親プロジェクト」

このプロジェクトは、放射性物質を吸収すると言われるひまわりの種を全国に配り、育った花からとれた種を福島に送って植えようという取り組みです。その活動に蒲中も賛同し、校内にひまわりを植えるという記事でした。さらに、余った苗があるので、個人でひまわりの里親になりませんかと書いてあったのです。

私は家で里親プロジェクトについて詳しく調べてみました。すると、意外な事実が分かりました。それは、「ひまわりは除染効果が低い」ということです。実際に農林水産省

が行った検証の結果で示されているようです。そうであるにも関わらず、なぜひまわりを植えるプロジェクトを続けているのでしょうか。この活動の目的は何なのでしょう。私は疑問に感じました。

その答えは、「福島ひまわり里親プロジェクト」のホームページにありました。それは、福島と全国の絆づくりのためです。

この活動で最初にひまわりを植えた方は次のように話していました。



「ひまわりひとつひとつが人の顔に見える。みんなが応援してもらっている感じだ。」

この言葉を耳にしたとき、私の頭の中に、一面ひまわりの咲く風景が浮かんできました。ひまわりは日が出ると、みんな太陽を向いて育っていきます。だから私のひまわりも、

蒲中のひまわりも、全国のひまわりも、そして福島のひまわりも、みんな同じ方向を向いて咲いているのです。そのひまわり一つ一つに、応援のメッセージや復興への希望が込められているのだと感じました。

みんなが同じ気持ちで復興に向かっていけば、元の福島に戻れる気がします。避難者の方たちも福島の家に帰れると思います。これからが復興にむけての本勝負なのかもしれません。

「絶対に忘れません。」

新しい出会い

西浦中学校 3年 尾崎大地

大地君は、西浦中のリーダーとしていろいろなところで活躍しています。生徒会では、副会長として会長を助けるポジションで頑張っています。部活動では、卓球部の部長を務め、チームをしっかりまとめていました。学級では、合唱コンクールの伴奏者を毎年つとめているそうです。

僕は子どもの頃、何度も引っ越しを経験しました。愛知県で生まれてすぐ、宮城県の仙台市へ、そして幼稚園に入園するときに横浜市へ移りました。当然仲の良い友達はおらず、分からないことや不安でいっぱいなのに、だれに話しかけていいのかわかりませんでした。大きな恐怖感を感じた僕は、入園して数日間、いつも幼稚園の門の前で泣いていました。そんな僕に、担任になった先生は、こう言うてくれました。

「自分からみんなに話しかけてごらん。きっとみんなも大地君に話しかけてくれるよ。」

僕は、近くにいた男の子に勇気を出してあいさつをしました。

「おはよう。」

すると、彼も答えてくれました。

東日本大震災のこと。震災からの復興はそう簡単なことではありません。実際に、福島でひまわりの種がとれても、放射能の心配からこの先の使い道に困ってしまうそうです。しかし、私が今できることはこれくらいしかないのです。忘れないためにもできることがしたいのです。

わたしの家のひまわりは今年の夏、鮮やかな黄色の花を咲かせました。種が取れたら、その「希望の種」を福島に送ります。被災地が、いち早く復興することを祈って。

「おはよう。」

それを聞いたとき、僕の心を覆っていた黒い雲が去り、とてもうれしい気持ちになったことをはっきりと覚えています。

4歳の頃、いつも1人で遊んでいる外国人の男の子がいました。僕には、その子が昔の自分と重なって見えました。そして一年前と同じように、その子に話しかけてみました。

「一緒に遊ぼう。」

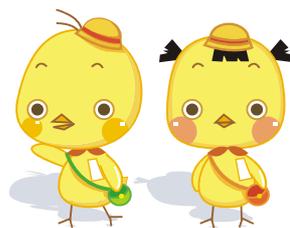
話しかけられた外国人の彼は、「えっ」と驚いた様子でしたが、すぐに笑顔になって、

「うん。」

と答えてくれました。

このように自分から勇気を出して話しかけていくことで、

友達がどんどん増えていきました。でも5歳



のとき、また愛知県に引っ越すことになりました。自分が生まれた場所に帰ることができるのがうれしいと思う反面、寂しい気持ちもありました。せっかく仲良くなれた友達とまた離れてしまう悲しみが僕を襲いました。お別れの日、友達からもらったメッセージカードには、こんなことが書いてありました。

「引っ越ししても新しい友達を作って頑張
ってね。自分たちのことを忘れないでね。」

僕はこの言葉を見て、愛知県でも頑張ろう
と思いました。

愛知県に引っ越してきてから約 10 年。僕
には今、たくさんの友達があります。せっかく

仲良くなった友達と別れ、知っている人が誰
もいない状況に飛び込む経験を重ねてきま
した。でも、これが僕を大きく成長させてく
れたと思います。

新しい世界に飛び込むとき、誰でも不安や
心配な気持ちでいっぱいになるでしょう。で
も、そこには、新しい発見、出会いがたくさ
ん待っています。自分から積極的に声を掛け
れば、必ず相手も心を開いてくれます。「お
はよう」その一言を、お互い気軽に交わせる
といいなと思います。半年後、僕はまた新し
い道に進みます。積極的にまた新たな人間関
係を築いていきたいと思っています。

じいちゃんの声

塩津中学校 3年 柴田 結佳

結佳さんは、いつも明るく、何事にもまじめに取り組んでいます。2年生の時には、市の代表として海外派遣にも参加しました。現在は、合唱コンクールに向けて、クラスの仲間と共に、全力で練習に励んでいます。

「ただいまー。」

その日、わたしは、いつものようにみっちり部活をやり、へとへとになって家へ帰りました。あれ、部屋がしんとしている。いつもなら、おじいちゃんが、「おかえり」って言いながら、時代劇を見ているのに。すぐに、おかしいなと思いました。外には車もないし、変な感じがしました。

でも、まあいいやと思いながら、誰もいない部屋で留守番をしていたら、突然、電話が鳴りました。慌てて出ると、お母さんでした。「もしもし、結佳？今、病院。じいちゃん、肺炎で1ヶ月ぐらい入院だって。まだ、もう少し帰れないから、よろしく。」

それを聞いた瞬間、心臓がどきんとして、何だか急に不安になりました。うそ、大丈夫

と思ったけど、

「えー。ふーん。じゃーね。」

と、なぜか、少し怖くない振りをして電話を切りました。

次の日、家族全員で病院に行きました。ベッドに寝ているじいちゃんは、とても弱々しく見えました。少し話すと、息が切れてしまい、つらそうなじいちゃん。想像していたよりも、肺炎が悪化していたらしく、その日は、たくさんの人がお見舞いに来ていました。

そして、次の日から、じいちゃんのない生活が始まりました。じいちゃんのない家の中。でも変わったことは



それだけではありませんでした。家事の分担が2倍になったこと。畑の野菜がばたりと食卓に出なくなったこと。それに、庭の花がいつもしゃんとしてるのに最近、元気がないこと。ちょっとしたことだけど、すごく気になりました。

それに、わたしもなんだか意味を感じなくなってきて、「ただいま」をあまり言わなくなりました。家にいつもいる人が一人いなくなっただけで、生活ががらりと変わりました。

当たり前にすぐそばにいて、当たり前すぎてあまり考えたことはなかったし、ちょっと邪魔だなと思ったこともありました。でも、心から感謝したこともあまりなかったなと思いました。実際にいなくなって、不安で、

正直、すごくさびしい気持ちになりました。

わたしは、道徳などの授業の感想で、「当たり前前の生活がうれしい」と書いた記憶があります。でも、その日の夜にはもう忘れてしまう自分がいます。それではいけないなと思いました。じいちゃんが家からいなくなって、本当に、当たり前前のすばらしさと幸せを感じました。今あるこの日常での暮らしが当たり前だと思えることが、とても幸せなことだとよく分かりました。

「ただいまー。」

それからじいちゃんはすっかり元気になり、庭の花も太陽に照らされて輝いています。

「おかえりい。」

じいちゃんの声が響きました。

道づくり

形原中学校 3年 鈴木 有 咲

ありさんは何事にも努力を惜しまず、全力で取り組むことができます。この夏はソフトボール部の部長として、チームを市内優勝に導きました。学級でも合唱コンクールに向けて、最優秀賞を取ろうと頑張っています。

「もうちょっと楽しんでいいよ。」

これは、私が悩んでいたとき、ピアノの先生がかけてくれた言葉です。そのときの私にはとても意味のある言葉で、救われた気持ちになりました。同時に、なぜこんなに素直に受け入れられたのだろうと思いました。

ピアノの先生は、礼儀正しく、笑顔を絶やさず、気配りのできる人です。言葉にできないような魅力を感じさせてくれるので、一番尊敬しています。いつか先生のようになりたいと、目標にしている人でもあります。

私は、私を救ってくれたのは、言葉そのものではなく、言葉を発した先生だったのではないかと気づきました。そして昔聞いた「桜

の木の話」を思い出しました。大岡信さんの「言葉の力」に出てくる話です。桜色の織物は桜の花びらではなく、樹皮を煮込んで染める。桜の花のピンク色は樹皮の色で、桜の木全体がピンクに色づこうとして、花びらはそれが先に少し現れただけ、という話です。



私は「人間も桜の木も同じだ」と思いました。ピアノの先生の言葉は、ピアノの先生そのものだったと分かりました。

私たちの住む街、蒲郡は、そんな大きな街ではないけれど、きっと魅力的な人がたくさん住んでいるだろうと思います。人によって

魅力はさまざまですが、まねできるとは思いません。なぜなら、個性が輝いていることが魅力だと考えるからです。だから、一人一人が魅力的になって、その数をさらに増やしていく努力が必要です。

韓国にある濟州島の島民は、島に3つのものがないと自慢しているそうです。まず、互いに助け合うため、困っている人がいない。困っている人がいないので、どろぼうがない。どろぼうがないので、家に門がない。つまり、困っている人、どろぼう、門の3つがないと言っているのです。私は、蒲郡も負けていられないと思いました。

蒲郡は、自然が美しく、街として魅力的です。しかし、蒲郡をつくり上げた先人に負けないよう、私たち中学生が蒲郡を考えていか

なければなりません。人、家、街づくりの中で私たち中学生にできるのは、人づくりの中の自分づくりだと思います。

私のピアノの先生や桜の木のように、芯が強く、各々の個性が輝く中学生を目指しましょう。こんな目標をもって生活していきましょうと、伝えたいです。

魯迅の「故郷」という作品の最後に、「もともと地上に道はない。歩く人が多くなればそれが道になるのだ」という言葉があります。蒲郡に住む中学生みんなが、個性を輝かそうと目標をもって進んでいけば、魅力的な人が多く住む街「蒲郡」が有名になると思います。これが私たち中学生の道づくりだと信じています。

自分に厳しく常に全力

中部中学校 3年 竹尾 佳 紘

竹尾君は、全国大会に出場した水泳部で熱心に練習に励みました。級長や生徒会役員を歴任し、学校生活のあらゆる場面で情熱的にリーダーシップを発揮しているそうです。

水をけり、腕を前へはこび、歯をくいしばる。苦しい。もう少しスピードをゆるめてしまおうかと思った。きつい。苦しい。50mを泳ぎ、ターンに入る。息がもたない。壁を強くけた。水面が近い。ゆっくり浮き上がろうとした時、息がすいたくて早く浮き上がろうとした。ラスト5mの旗。体の力が抜けていく。ラストスパート、僅かな力を出しきる。壁に手がふれた。100mの背泳ぎ、去年最後の記録会。自己ベストをうわまわるタイムだった。しかし、悔しかった。

悔いが残るとき。僕はそれは過去の自分の記録に負けたときだと考えていた。しかし、過去最高の記録を出せたとしても、必ず悔し

くないわけではないと、このとき初めて知った。嬉しい、悲しい、楽しい、といった気持ちは、本や、自分の体験を通して今までにしっかり理解できていたが、悔しいの中身はまだよく知らなかった。「悔しい」の正体は何なのだろうか。

悔しいを辞書で調べると、「物事が思うとおりにならなかったりして残念でたまらない。」と出てくる。つまり、自分の思っていたレベルまで物事が及ばなかったときに、悔しいという気持ちがあてはまるということだ。僕の考えていたレベルは、過去の自分の記録だったのだが、それが違うということは、僕の考えでは「ベストの自分」が当てはまる。

その日、その一瞬、自分の持っている力、積んできた経験の全てを出しきったら出るだろう記録と自分、それが「ベストの自分」だ。これに近づこうとすれば必ず苦しいし、きつい。だから楽な方へ逃げたいと思い、「ベストの自分」から遠ざかってしまうこともある。こうなると、もっとできたはずなのに残念だ、と悔やむことになる。

しかし、悔いを残さないようにするために「ベストの自分」に近づこうとすることはとても難しい。誰だって楽しいし、苦しいことはしたくない。この気持ちは普段からあるし、水泳では特によく現れる。もう少し手をぬいても、ちょっと浮き上がりをさぼっても、今日は調子悪いし、息をたくさん吸いたい、といったように、練習してきたことをむだにするような、ベストの自分から遠ざかるような考えが浮かんでくる。無意識のうちに考えていたことをしてしまっているかもしれないし、意図的に行うかもしれない。誰だって苦しいことはしたくないからだ。

しかし、そんなことは許されない。泳いでいるとき、きっと誰かに応援されている。水泳に限らずいえることだ。弱い自分に負けることは簡単だが、それは自分を応援したり、

期待してくれたりする人を裏切ることになる。それは絶対にだめだ。だからよけい苦しいし、いやになるが、それは同時に嬉しいことだ。応援されている、期待されている。だから弱い考えをふきとばし、ベストの自分に1歩近づける。

あの日、僕は少しスピードをゆるめた。浮き上がりも早すぎた。ラストもへなへなとしたものだった。応援してくれていた仲間の声を裏切り、ベストの自分から遠い記録を出してしまっ



た。だから悔しかった。もうこんな思いはしたくない。今年、水泳部の目標にはそんな思いも込められている。もちろん僕たち3年生の話し合いで決めたものだ。僕は話し合いで自分の思いを仲間に伝えた。思いのこもった目標はいつも練習前にさげばれている。

「自分に厳しく、常に全力、限界突破！絶対つかめ東三二連覇！悔いの残らないように泳ぎきろう！」

今年、絶対悔いは残さない。

熱い夏

大塚中学校 3年 山本好花

何事にも全力投球で取り組むことのできる好花さん。バレー部では部長を務め、持ち前の明るさや手を抜かない懸命なプレーでチームを引っ張りました。また、前期は副級長を務め、後期は生徒会書記に当選したりするなど友達からの信頼も厚いようです。

「ありがとうございました。」

両チームから大きな声が響き渡り、私たち大塚中学校バレーボール部の熱い熱い夏は東三大会2回戦で幕を閉じました。

思い返せば、私たちの本格的な練習が始まったのは、2年生の夏。私はレギュラーとして先輩のチームに入れてもらっていました。先輩の分まで頑張らなければと思っていま

したが、空回りしてしまい、何一つ満足できることはありませんでした。私は、新チームでのリベンジを強く心に決めました。

そんな時、私は先生から部長に任命されました。先輩たちのチームで試合を経験させてもらったこともあり、その経験を生かすことを期待されていました。しかし、チームをまとめることは思った以上に大変でした。部長らしく指示することもできない私には…。

秋の新人戦。勝ちたいという強い気持ちで練習をしてこなかった私たちのチームは、勝てるはずがありません。「肩書きだけの部長ではいけない。みんなも私も勝ちたい。仲良くしているだけの部活が楽しいのではない。」そんな当たり前のことに気づいていたはずなのに、行動に移せなかった自分を責めました。それからは、点数を決めたときの声、プレー中のアドバイス、チームを盛り上げるために今まで以上に大きな声を出しました。思いをみんなに伝えることもしました。

そして、迎えた3年生春季市内大会。厳しい試合ばかりだったけれど、結果は優勝。大塚中学校に20数年ぶりの優勝旗を持ち帰ることができました。

しかし、夏の大会前日。私は40度近い熱を出し倒れました。体調管理もできない自分に腹が立ちました。春の大会後からの練習も

思うようにいかず、あせるばかりでした。大会当日も、熱は下がらなかったけど、コートに立ちました。声もかすれて出ません。しかし、口を動かすと、周りの仲間が聞き取り、私の言葉を大きな声で伝えてくれていました。優勝は逃したものの、3位入賞を果たし、東三大会へつなげました。

そして、最後の試合、東三大会2回戦。強豪校との対戦でした。声がかれていても、顔を真っ赤にして応援する1・2年生。「技術なんて関係ない。球を落とさなければ勝てるんだ。」その一心でみんなでつなぐボール。点数が決まれば、思い切り飛びあがり、コートをかけまわ



るメンバー。勝てなかったけれど、最高の全員プレーで試合を締めくくりました。

部長として、みんなを支えようとしてきたこの一年。しかし、気づいてみれば、私がみんなに支えてもらっていました。自分の思いを躊躇することなく、仲間につけてみれば、必ず応えてくれました。中学校生活は、残すところ数ヶ月です。小・中学校とともに過ごしてきたこの仲間と、これからも本音で語り合い、高め合っていきたいです。

何気ない言葉

三谷中学校 3年 横田 渚

渚さんは、明るく、学年のムードメーカーで、体育大会の縦割り演舞ではリーダーとして活躍しました。また、周りに気を配り、困っている友達をさりげなく支える、やさしさも持っています。

転んでひざをすりむくと痛みます。包丁で指を切っても血が出て痛みます。傷を見てい

るだけでも痛いのが伝わってきます。

では言葉で傷つけられた心はどうでしょう。残念ながら見えません。傷の深さもわかりません。

普段使っている何気ない一言で、もしかしたらたくさんの人を傷つけてしまっているかもしれません。いや傷つけていたに違いないのです。

そのことは、私が身をもって言葉で傷つくことの怖さを経験したから分かりました。

それは何気ない友達との会話でした。友達の言った一言。

「やだ、キモッ。」

もともと「キモイ」っていうのは「気持ち悪い」ことなんだろうけど、全然気持ち悪くなくても「キモイ、キモイ」と連呼することもあります。私も周りの友達も、当たり前のように毎日使っている言葉です。

いつもなら笑い飛ばして次の会話に進んでいくのに、なぜかその日は私の心にぐささと突き刺さりました。

頭の中では分かっていた。きっとそんなに深い意味があって言っているわけではないはず。でも、だからやっかいです。相手には悪気はないのです。

そのときから急に学校が楽しくなくなりました。学校に行きたくなくなりました。涙が涙もなくぼろぼろと出てきます。頭も痛い。お腹も痛い。気持ち悪い。本当につらかったです。実際に学校を休んだ日もありました。

でも、そんな私の心の傷を治すことができたのも、友達や先生の何気ない一言でした。

学校を休んだ時に届けられるハートフル

という連絡用の封筒。その封筒の両面にきれいな絵や先生の似顔絵、そして友達からのたくさんの応援メッセージ。学校で先生がかけてくれる「大丈夫か？」の言葉。今までもきつとたくさんそんな言葉はもらっていたはずなのに、とてもうれしく感じられました。

話を聞くと、不登校と呼ばれる子がたくさんいるようです。いろんな事情があるだろうけど、その子たちも私たちと同じように楽しく学校に通っていたに違いありません。それがもしかしたら、何気ない友達の一言で教室に入れなくなってしまったのかもしれないと思いました。

自分が経験して初めてわかりました。言葉で人を傷つけるって目に見えない分残酷だな。私が「キモイ」とか言ったとき、笑っている友達。顔は笑っていたけど心は傷ついてたんじゃないかな？私の一言で学校が嫌になってしまわなかったかな？反省しなければいけないことがたくさんあります。

言葉って人を優しい気持ちやうれしい気持ちにすることもできるし、悲しい気持ちにもさせます。同じ言葉でも、相手の受け取り方で変わってしまうことだってあります。本当に難しいけど、私はみんなをやさしい気持ちにできる言葉を使えるような人になりたいと思います。



広島を訪れて思うこと

蒲郡東高等学校 2年 坪井 一 樹

高校1年より生徒会の役員として学校行事の企画、運営に携わっています。3期連続で役員を務め、新しいことにも多く取り組みをはじめたそうです。温かい人柄で仲間も多く、責任感が強く、最後までやり遂げる心の持ち主だそうです。

1945年8月6日広島に原子爆弾投下。同年同月9日長崎に原子爆弾投下。日本人ならこの事実は誰もが知っていることです。私はこの5月に修学旅行で広島を訪れました。平和学習として戦争の酷さ、原爆の恐ろしさなどを学ぶためです。そこで私は本当の恐ろしさ、悲惨さを知ることになりました。

私も何も知らずに広島に行ったわけではありません。戦争についての基本的な知識があり、学校で事前学習をしました。しかし、事実はより恐ろしいものでした。私は広島の平和資料館で見たものに対して声が出ませんでした。絶句しました。本当に一言も出ませんでした。その悲惨さ、残酷さ……。今まで私が学んできたものとは別の話ではないかと疑うほど驚きました。平和資料館には、当時のものや資料が数多く展示してありました。特に記憶に残っているのは原爆が落ちた直後の人のかたどった蠟人形です。皮膚はただれ肉は落ち、とても悲惨な状況が感じられるものでした。時間がたった今でも忘れることができない、とてもインパクトのあるものでした。

広島で、もう1つ貴重な体験をしました。それは戦争を体験し、原爆がどのようなものであったかを知っている被爆者の方の講演を聞いたことです。講演では教科書に載っていない、いくつかの事実を知ることができました。強い印象を受けたのは、原爆投下後に

多くの死体が町中にあり、処理することができずに、結局は死体を積み上げて油をかけて焼いたという話です。「こんなことはしたくなかった。」と辛そうに話をされました。もう1つ、私たちに強く訴えていました。「人を殺せば殺人です。原爆を使って人を殺し戦争を終わらせたのは正義ですか」と。この言葉には、家族友人を失った辛さ、悔しさと戦争への憎しみが感じられました。このような機会がなければ聞くことはなかったと思います。

修学旅行や終戦関連のニュースを見て改めて思いました。戦争は絶対にしてはいけないことだと。戦争は人を悲しませるだけです。戦争で家族を奪われる、罪のない人たちが殺しあう、どれも大変辛く悲しいことです。こんなことはあってはいけない。それと同時にこの世界から原爆をなくさなければいけないということです。現在世界には推定1万9千個の原爆があるのです。容易ではないですが世界の将来のためにもなくさなければなりません。

今の私にできることは、戦争はしてはいけないことだと強く思うことです。

そして世界の人々や次の世代の人々にも同じ思いを持ってもらうことです。そのために、戦争で起きたことを忘れてはいけません。そ



の事実を風化させないために次の世代へ伝
えていかなければいけません。二度と戦争が
起きないように。

生活の便利さと環境について考える

蒲郡高等学校 1年 小 治 香名恵

小治さんは、笑顔が素敵で、友人からの信頼も厚いです。後期はホームルーム役員となり、クラスのリーダーとして奮闘中です。今後は持ち前の明るさと行動力で、クラスを引っ張ってくれることと期待しています。

今は本当に生活が便利だと思います。私たちにとっては当たり前になりすぎて普段は気づかないかもしれませんが、ふと考えると便利なことばかりです。たとえば、私は自転車で学校に通っています。自転車によって歩くよりも通学時間を短くすることができるし、重たい荷物を持たなくても済むなど、便利な点がたくさんあります。もう一つ例を挙げると、携帯電話です。携帯電話では相手とすぐに連絡を取ることができ、多くの人が仕事でも利用し、今では生活の一部となっています。このように便利な世の中になってきた一方で、私たちは環境について考えなければならぬことがたくさんあります。

よく環境について考える時に出てくる問題は、「地球温暖化」です。なぜ地球温暖化が良くないかという、気温が上昇し、海水の上昇が進むので、雨の量が多くなります。特に、島や沿岸部では大雨が降るようになります。しかし、大陸の中央部では気温の上昇によって土地の水分が蒸発してしまい、乾燥化が進み、砂漠が広がっていきます。そのため、畑がなくなり世界的な食料危機が起こるとも言われます。地球温暖化という問題がニュースや新聞で取り上げられますが、私たちは本当に環境を意識出来ているのでしょうか。私は問題をそのままにしておくのは良く

ないと思います。

私たちの身近にあるビニール袋を例に挙げましょう。スーパーなどでは1枚5円で販売していますが、コンビニでは普通無料でもらうことができます。私たちにできる



ことは、限られています。だから、私はビニール袋を受け取らないことだけでも徹底すべきだと思います。便利な世の中になり、誰もが自転車を使えることが当たり前、携帯電話を使えることが当たり前になっています。私たちは便利な生活の中で生きてきたので、急に生活を変えろと言われても、率直に言って不可能です。問題をその時だけで終わらせずに、今自分ができるところをやっていくことが大事だと思います。生活が便利なことは決して悪いことではありませんが、その裏には未来へつなげる環境問題があることを考えながら生活していくべきだと思います。

まず自分は、マイバッグを持ち歩くことから始めようと思います。コンビニで袋をもらう前に「バッグがあるので要りません」と言えるようになりたいです。皆さんはどんなことから始めますか。

迷惑について考える

三谷水産高等学校 3年 梅村 拓己

梅村くんは、穏やかで思いやりがあり、何事にも努力を惜しまない性格で、友人からの信頼も厚く、また面倒見もいたため、増殖部では同級生のみならず後輩からも慕われています。現在は、水高祭の水族館展示のため、日々生物の管理に精を出しています。

「人に迷惑を掛けちゃいけない。」私は小さい頃、親にそう叱られたことが何度かあったが、小さい頃に、このセリフを言われたことのある人は、私以外にもいるだろう。その頃の私は、小さいながらも「もう怒られたくない。」と、言いつけを守る努力をした。おかげで今では「人に迷惑を掛けるな。」と叱られることは無くなった。たぶん自分の中で迷惑を掛けないことが当たり前になっているからだろう。

しかし、叱られることが無くなったとはいえ、「誰にも迷惑を掛けていないか。」と言われると、そこまで言い切れる自信はない。迷惑を掛けないように注意していても、無意識のうちに、もしくはどうしようもない状況の中で、人に迷惑を掛けてしまうことはある。そんなことを考えれば、絶対に他人に迷惑を掛けたことがないなんていう人はいないのではないだろうか。

しかし、世の中には他人に対する迷惑を全くと言っていいほど考えない人がいる。そういう人達は、自分たちのやりたいことをやって周囲に対しての気遣いが無い。

私の周りで、最近一番迷惑だと思うのがバイクだ。私の家の裏には、少し大きな道路を挟んでパチンコ店があるのだが、そこには毎日のように数人の若者がたむろしている。それが昼間なら何も言うことはないのだけど、毎日決まって夜中で、しかも皆が眠りにつくか、もしくは寝静まった頃に急に始めるのだ。

家の裏の道を何度も何度も行ったり来たりし、バイクで無駄に排気ガスと騒音を撒き散らしている。それが数分で済めば良いが、だいたい30分以上続く。長いときだと1時間以上も走っている。この音は毎日のように私の眠りを妨げる。おかげで私は、しばらくの間、寝不足が続いている。

バイク以外にも、話し声や笑い声が聞こえてくることがある。別に「話すな！笑うな！」とは言わないが、問題なのはその時間帯だ。少しでも、時間と場所に対して考えることが出来れば、誰かに迷惑を掛けることもない。結果的にそのほうが、自分たちも楽しく過ごせるはずで、そうすれば一石二鳥すべてが丸く収まるのだ。「自分達だけで生きているわけではない。」そんな視点はとても大切だと思う。ただ、迷惑を掛ける側と迷惑を掛けられる側、一般的には、迷惑を掛けられる側には問題がないことがほとんどである。迷惑を掛ける側にちょっとした考え方の変化、やさしい思いやりがあって他人を思いやる事が出来れば、こうした問題は普通起こらない。

殺人事件やいじめなど、つらい話の多い世の中なので、一人一人が、こうしたやさしさを持つことが、今、求められているのではないかと思う。できれば、他人に対する寛容の心も持てるといいが、それは、すべての人に求められることなのかもしれない。

